

在宅介護終了後の家族介護者の達成感・満足感および空虚感と死別前要因との関連

桂 晶子¹⁾、佐々木明子²⁾

キーワード：介護者、死別、要介護高齢者、満足感、役割喪失

要 旨

本研究は、在宅要介護高齢者と死別した介護者の、介護と死の看取りに対する達成感・満足感および介護役割喪失に伴う空虚感と死別前要因との関連を明らかにすること、また、死別後の生活適応を視野に入れた死別前からの介護者支援について検討することを目的とした。過去1年半から2ヶ月前の間に在宅要介護高齢者と死別した介護者を対象に質問紙調査を実施し、有効回答者86人を分析対象とした。結果は以下の通りであった。1. 要介護以降の被介護者との関係性と達成感・満足感との間に有意な正の相関が認められた ($r=0.31, p<0.05$)。2. 介護対処方略の下位次元の一つである「介護におけるペース配分」と達成感・満足感との間に有意な正の相関が認められた ($r=0.45, p<0.01$)。3. 介護中に生きがいを持っていた介護者は持たなかった者より空虚感が低かった ($p<0.05$)。以上より、介護と死の看取りに対する達成感・満足感を高め、空虚感を軽減するための死別前における支援として、介護者と被介護者との関係性を良好に保つよう関係調整を図ること、介護者が健康を維持しながら介護できるよう健康管理を支援すること、介護者の生きがいを尊重することが重要であると示唆された。

The Relations between Family Caregivers' Sense of Accomplishment, Satisfaction, and Emptiness and Pre-Bereavement Conditions

Shoko Katsura¹⁾, Akiko Sasaki²⁾

Key words : caregiver, bereavement, elderly, satisfaction, role loss

Abstract :

The purpose of this study was to determine the relations between the sense of accomplishment, satisfaction and emptiness held by family members who took care of their elderly relatives at home and the conditions that existed until the death of their beloved ones. A questionnaire was administered to people who lost their elderly family members within the past 2.5-month to 1.5 year period, whom they took care of until their death. We received a total of 86 valid questionnaires. The results of our analysis are as follows. (1) The degree of closeness between the caregivers and the elderly care-receivers was positively correlated with the intensity of the caregivers' feelings of accomplishment and satisfaction ($r=0.31, p<0.05$). (2) A statistically significant positive correlations was also found between the "pace distribution in caring," one of the low-rank dimensions of the method of caring management, and the caregivers' sense of achievement and satisfaction ($r=0.45, p<0.01$). (3) The people who had a clear purpose in life while taking care of their elderly family members felt less empty after the death of their beloved ones than those who did not ($p<0.05$).

1) 宮城大学看護学部

Miyagi University School of Nursing

2) 東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科

Graduate School of Health Sciences, Tokyo Medical and Dental University

I. はじめに

介護保険制度は自立支援、在宅重視を理念としており、制度が施行された2000年から2004年にかけて、要介護認定者数は218万人から387万人へと増加し、居宅サービス利用者においては97万人から231万人へと138%の大幅な伸びを示した。また、2005年の介護保険制度改正では、高齢者が住みながら地域で暮らし続けることができるよう地域における介護サービス基盤の計画的整備の推進が掲げられ¹⁾、在宅要介護高齢者は今後も増加することが予想される。このことは、在宅で生活、療養する高齢者を介護したのちにその高齢者との死別を経験する遺族介護者の増加に連動すると考えられる。

家族にとって、大切な家族の一員を失うことは大きな深い悲しみを伴う危機的出来事であり²⁾、これは在宅要介護高齢者とその介護者においても例外とはいえない。死別体験者の死別後の反応としては、抑うつ感、悲嘆、睡眠障害など、身体症状では疲労感、食欲不振、動悸などが挙げられている^{3,4)}。また、死別体験者が悲嘆のプロセスと呼ばれる一連の心理過程をたどること等が報告されており、これまでに遺族支援に関する数多くの研究が蓄積されてきた⁵⁻⁷⁾。しかし、先行研究を概観すると、終末期医療におけるがん患者の死に伴う悲嘆に関する研究が多い⁸⁻¹⁰⁾。配偶者の死別に関する研究も報告されているが¹¹⁻¹³⁾、在宅要介護高齢者と死別した家族介護者への死別後の支援に関する研究は十分とはいえない。

要介護高齢者看取り後の介護者を対象とした山田ら¹⁴⁾の研究では、長期間の介護を行った介護者の介護終了後の抑うつ感の改善には2年近くの期間が、介護による慢性疲労の回復には1年以上の期間が必要であると示唆している。また、がん患者や子どもとの死別については、突然の予期しない死別の場合、死別後の適応はより困難であるとされているが^{15,16)}、要介護高齢者との死別については、臥床期間が長い場合は死別前の生活時間の大半を夫の介護等に費やし、死別後の妻の生活適応には困難がともなうとする報告もある¹⁷⁾。このことから、介護の長期化が少なくない在宅要介護高齢者の介護者に特有の死別後の反応がみられると

も考えられる。

抑うつ感や悲嘆とは別の情動反応として、大須賀¹⁸⁾は、妻が夫喪失後に感じる満足感と後悔を調査し、介護を精一杯やれたという実感は満足感につながると述べ、さらに妻の満足感は喪失後立ち直るエネルギーになると考えられると述べている。一方、死別後の役割移行と適応について鈴木¹⁹⁾は、家族との死別は遺族にさまざまな役割変化を強いる結果となり、その役割移行が円滑に進まない場合には、家族関係に大きな歪みが出現すると述べている。これらのことから、介護への達成感や看取りに対する満足感は、死別後の新たな生活へ適応する上で促進的に作用し、役割移行の障害は抑制的に作用する可能性が考えられる。在宅要介護高齢者と死別した介護者の死別後の反応については十分な解明がなされていないことから、死別後の介護者の状況を多角的にとらえるとともに、死別後の生活適応に向けた支援を見出すことが重要である。

そこで本研究は、在宅要介護高齢者と死別した介護者の介護と死の看取りに対する達成感・満足感および介護役割喪失に伴う空虚感の状況を把握し、それらに関連する死別前要因を明らかにすることを目的とする。これらを通して死別後の生活適応を視野に入れた死別前からの介護者支援について検討する。

II. 研究方法

1. 対象

訪問看護ステーションを利用し、過去1年半から2ヶ月前までの間に65歳以上の利用者を看取り終えた家族のなかの主介護者（以下、介護者とする）を対象とした。利用者が病院で亡くなった場合は、死亡前の入院期間が1ヶ月以内の利用者の介護者を対象に含めた。A県内十数ヶ所の訪問看護ステーションより協力を得、対象者133人へ電話にて調査依頼を行い同意の得られた101人に質問紙を送付した。その結果、93人から回答があり（回収率92.1%）、有効回答者86人（有効回答率85.1%）を分析対象とした。

2. 調査方法および倫理的配慮

平成17年3月下旬～5月上旬に対象者へ郵送法による質問紙調査を実施した。

個人情報を守るため、対象者のリストアップ、電話での調査の説明と依頼、および質問紙の発送は訪問看護ステーションの職員が行った。対象者へ調査の説明をする際の説明内容は、筆者が作成した「電話連絡の際の説明」の文章に沿って行ってもらった。質問紙の回収については、介護者が記入した質問紙の返信先を筆者宛とし回収をした。

なお、研究目的、プライバシー保護の確約、調査協力は自由意志によるもので断っても不利益を被らないこと等の説明は、訪問看護ステーション職員から介護者への電話の際と、質問紙送付時に文書を用いて行い、同意書への署名をもって調査協力の同意を確認した。

3. 調査内容

1) 介護者の状況

介護者の年齢、性別、続柄、職業、および被介護者死別後の経過期間を把握した。

2) 介護の状況

介護期間、介護への対処方略を把握した。対処方略は、岡林ら²⁰⁾が作成した尺度を適用した。この尺度は、介護者をとる介護への対処方略を、情動的なストレス反応を除外して項目が編集され、1. 介護におけるペース配分、2. 介護役割の積極的受容、3. 気分転換、4. 私的支援追究、5. 公的支援追究の5次元16項目からなる。

3) 介護中の介護者の生活状況

介護実施中における介護者の生活状況として、1. 趣味・楽しみ、2. 生きがい、3. 行き来する友人、4. 家庭での介護以外の役割、5. 地域・町内での役割、ボランティア活動、6. 社会的役割としての就労、これらの状況を「あり」、「なし」の2件法で、7. 町内自治会活動への参加、8. 外出頻度を4件法で把握した。但し、分析の際は、町内自治会活動への参加、外出頻度ともに2群に分類した。

4) 被介護者と介護者との関係性

要介護以前と、要介護以降の二時点における

被介護者と介護者との関係性を「とてもよい関係だった」から「とても悪い関係だった」までの4件法で把握した。

5) 介護と死の看取りに対する達成感・満足感、介護役割喪失に伴う空虚感

介護と死の看取りに対する達成感・満足感の把握については、「介護を成し遂げたという達成感がある」、「満足のいく看取りができたと感じる」の2項目を適用した。これを「全くその通り」から「全く違う」までの5件法で測定し順に1点から5点を与えた。この2項目を主成分分析した結果、1因子のみが抽出され(固有値1.6、寄与率80.6%)、 α 信頼係数は0.757であった。よって、達成感・満足感を単一の得点で表現した(得点範囲2-10点)。

介護役割喪失に伴う空虚感については、被介護者の介護を介護者の役割の一つであると解釈し「空の巣症候群 empty nest syndrome」²¹⁾の概念を適用して空虚感を把握した。empty nest syndromeでは、母親役割等の終了によって肩の荷がおりたと思うと同時に心の中にぽっかり穴が空いたような空虚な気持ちに陥るとされ、広義では対象喪失後の不適応状態と定義されている²²⁾。本調査では、empty nest syndromeに伴う感情を参考として²¹⁻²⁴⁾、「介護が終えたことで生活のはりを失ったと感じる」、「介護を終えむなしい気持ちがする」、「介護を終え自分の役割がなくなったと感じる」など6項目を選定した。これを、達成感・満足感と同様に5件法で測定し順に1点から5点を与えた。選定した6項目を主成分分析した結果、1因子のみが抽出され(固有値3.9、寄与率65.7%)、 α 信頼係数は0.893であった。よって、空虚感を単一の得点で表現した(得点範囲6-30点)。

4. 分析

データを集計し、介護と死の看取りに対する達成感・満足感、および介護役割喪失に伴う空虚感の状況を明らかにした。次に、被介護者死別以前の諸要因と達成感・満足感、および空虚感との関連を検討した。分析にはt検定、一元配置分散分析、Spearmanの順位相関係数を用いた。データの

集計および解析にはSPSS 13.0J for windowsを使用した。

Ⅲ. 用語の操作的定義

「介護と死の看取りに対する達成感・満足感」：介護者が被介護者の介護を終えた後に感じる介護を成し遂げたという達成感、および被介護者の死の看取りに対して介護者が満足のいく死の看取りをしたと感じること。

「介護役割喪失に伴う空虚感」：被介護者の介護を介護者の役割の一つであると解釈し、被介護者との死別に伴う介護役割の喪失から生じる介護者のむなしさ、さびしさなどの空虚な気持ち。

Ⅳ. 結果

1. 介護者の特徴

介護者の特徴は表1に示すとおりであり、性別は男性13人(15.1%)、女性73人(84.9%)で、平均年齢は64.5±12.2歳であった。被介護者からみた介護者の続柄は、妻が31人(36.0%)と最も多く、次いで、嫁24人(27.9%)、娘14人(16.3%)、息子9人(10.5%)、夫3人(3.5%)、その他5人(5.8%)であった。職業については、会社員、自営業、パートタイマーなど何らかの職業をもっている人は30人(34.8%)、無職の人は53人(61.6%)であった。

介護者の平均介護期間は、74.4±88.5ヶ月であり、被介護者死別からの平均経過期間は10.3±5.0ヶ月であった。

	人 (%)
性別	
男性	13 (15.1)
女性	73 (84.9)
平均年齢	64.5±12.2歳
続柄	
夫	3 (3.5)
妻	31 (36.0)
息子	9 (10.5)
娘	14 (16.3)
嫁	24 (27.9)
その他	5 (5.8)
職業	
会社員・公務員	2 (2.3)
自営業	7 (8.1)
農業・林業・漁業	10 (11.6)
パートタイマー	11 (12.8)
なし	53 (61.6)
その他	3 (3.5)
平均介護期間	74.4±88.5ヶ月
被介護者死別からの平均経過期間	10.3±5.0ヶ月

n=86

2. 介護と死の看取りに対する達成感・満足感および介護役割喪失に伴う空虚感

介護と死の看取りに対する達成感・満足感の得点(10点満点)は最低4点～最高10点で平均得点は8.1±1.5であった。介護役割喪失に伴う空虚感の得点(30点満点)は最低6点～最高28点で平均得点は12.7±5.9であった。

介護と死の看取りに対する達成感・満足感および介護役割喪失に伴う空虚感の項目別の回答分布は表2に示すとおりである。回答選択肢の「全くその通り」と「まあその通り」を「その通り」に、「少し違う」と「全く違う」を「違う」に集約させて解釈すると、達成感・満足感については、「介護を成し遂げた達成感がある」に対して「その通り」と回答した介護者は61人(70.9%)、「どちらともいえない」は22人(25.6%)、「違う」は3人(3.5%)であった。「満足のいく看取りをしたと感じる」に「その通り」と回答した人は66人(76.7%)、「どちらともいえない」は18人(20.9%)、「違う」は2人(2.5%)であった。

介護役割喪失に伴う空虚感については、「介護を終えむなししい気持ちがする」に「その通り」と回答した人は20人(23.3%)、「どちらともいえない」は21人(24.4%)、「違う」は45人(52.3%)であった。「介護を終えたことで生活のほりを失ったと感じる」に「その通り」と回答した人は18人(20.9%)、「どちらともいえない」は21人(24.4%)、「違う」は47人(54.7%)であった。「介護を終え自分の役割がなくなったと感じる」に「その通り」と回答した人は14人(16.2%)、「どちらともいえない」は13人(15.1%)、「違う」は59人(68.6%)であった。「介護を終え次に何をしたらよいかと戸惑う」に「その通り」と回答した人は12人(14.0%)、「どちらともいえない」は10人(11.6%)、「違う」は64人(74.4%)であった。「介護を終えてからつい時間をもてあましてしまう」に「その通り」と回答した人は10人(11.6%)、「どちらともいえない」は10人(11.6%)、「違う」は66人(76.7%)であった。「介護を終えてからやる気がおこらない」に「その通り」と回答した人は9人(10.4%)、「どちらともいえない」は13人(15.1%)、「違う」は64人(74.4%)であった。

表2 介護と死の看取りに対する達成感・満足感および介護役割喪失に伴う空虚感の回答分布 人 (%)

	全くその通り	まあその通り	どちらともいえない	少し違う	全く違う
<介護と死の看取りに対する達成感・満足感>					
介護を成し遂げたという達成感がある	29 (33.7)	32 (37.2)	22 (25.6)	3 (3.5)	0 (0.0)
私自身、満足のいく看取りができたと感じる	26 (30.2)	40 (46.5)	18 (20.9)	2 (2.3)	0 (0.0)
<介護役割喪失に伴う空虚感>					
介護を終えむなしい気持ちがする	8 (9.3)	12 (14.0)	21 (24.4)	16 (18.6)	29 (33.7)
介護を終えたことで生活のはりを失ったと感じる	5 (5.8)	13 (15.1)	21 (24.4)	20 (23.3)	27 (31.4)
介護を終え自分の役割がなくなったと感じる	7 (8.1)	7 (8.1)	13 (15.1)	19 (22.1)	40 (46.5)
介護を終え次に何をしたらよいかと戸惑う	6 (7.0)	6 (7.0)	10 (11.6)	23 (26.7)	41 (47.7)
介護を終えてからつい時間をもてあましてしまう	2 (2.3)	8 (9.3)	10 (11.6)	23 (26.7)	43 (50.0)
介護を終えてからやる気がおこらない	2 (2.3)	7 (8.1)	13 (15.1)	19 (22.1)	45 (52.3)

n=86

3. 死別前要因と達成感・満足感および空虚感との関連

1) 介護者の属性との関連

介護者の性別、続柄と達成感・満足感および空虚感との関連を表3に示した。

達成感・満足感については、男性の平均得点は8.2±1.6、女性は8.1±1.5であり、性別との間に関連はみられなかった。続柄別に達成感・満足感の得点をみると、平均得点が最も高かったのは息子の8.6±1.7、次いで夫8.5±1.3、娘8.1±1.8、妻7.8±1.5、その他7.8±1.3、嫁7.5±1.4であった。なお、介護者の続柄と達成感・満足感との間に関連はみられなかった。

空虚感については、男性の平均得点は12.9±6.4、女性は12.6±5.9であり、性別との間に関連はみられなかった。続柄別に空虚感の得点をみると、平均得点が最も高かったのは夫の21.7±5.8、次いで妻14.7±7.0、娘12.7±4.5、その他10.8±1.6、嫁10.3±4.3、息子10.0±3.9であった。介護者の続柄と空虚感との間に関連が認められ (p<0.01)、多重比較を行った結果、夫と息子、夫と嫁との間に有意差があり、夫の空虚感の得点は息子 (p<0.05)、嫁 (p<0.05) よりも有意に高かった。また、妻と嫁との間に有意傾向がみられ、妻の空虚感の得点は嫁よりも高い傾向にあった (p<0.1)。

介護者の年齢と達成感・満足感、空虚感との関連については表4に示すとおりであり、達成感・満足感 (r=0.32, p<0.01)、空虚感 (r=0.25, p<0.05) のいずれも介護者の年齢と有意な正の相関を示した。

表3 介護者の続柄と達成感・満足感、空虚感との関連 mean±SD

		達成感・満足感	空虚感
性別	男性 (n=13)	8.2±1.6	12.9±6.4
	女性 (n=73)	8.0±1.5	12.6±5.9
続柄	夫 (n=3)	8.5±1.3	21.7±5.8
	妻 (n=31)	7.8±1.5	14.7±7.0
	息子 (n=9)	8.6±1.7	10.0±3.9
	娘 (n=14)	8.1±1.8	12.7±4.5
	嫁 (n=24)	7.5±1.4	10.3±4.3
	その他 (n=5)	7.8±1.3	10.8±1.6

t検定、一元配置分散分析 **p<0.01

表4 介護者の年齢と達成感・満足感、空虚感との相関係数

	達成感・満足感	空虚感
介護者の年齢	0.32 **	0.25 *

Spearmanの順位相関 *p<0.05 **p<0.01

2) 介護中の生活状況との関連

介護中の生活状況と達成感・満足感および空虚感との関連を表5に示した。

達成感・満足感と諸変数との関連については、町内自治会活動への参加および外出頻度に有意水準両側0.1で有意傾向が認められ、町内自治会活動に参加する介護者は不参加の者より達成感・満足感の平均得点が低い傾向にあった。また、外出頻度が週3~4回以上の介護者は、週1回以下の者より達成感・満足感の平均得点が低い傾向にあった。

空虚感と緒変数との関連については、生きがいとの間に関連が認められ、介護中に生きがいがあった介護者はなかった者より空虚感の平均得点が低かった (p<0.05)。なお、生きがい以外の諸変数と空虚感との間に有意な関連は認められなかったが、地域・町内役割やボランティア

ア活動を除くすべての変数において、「あり/参加/週3～4回以上」群は、「なし/不参加/週1回以下」の群よりも空虚感の平均得点が低かった。

表5 介護中の生活状況と達成感・満足感、空虚感との関連

		mean±SD	
		達成感・満足感	空虚感
趣味・楽しみ	あり (n=57)	8.1±1.5	12.2±5.7
	なし (n=29)	7.9±1.5	13.6±6.2
生きがい	あり (n=60)	8.2±1.5	11.9±5.3 *
	なし (n=26)	7.8±1.5	14.6±6.8
行き来する友人	あり (n=74)	8.1±1.4	12.4±5.4
	なし (n=12)	7.6±1.6	14.4±8.4
家庭での介護以外の役割	あり (n=74)	8.0±1.5	12.3±5.4
	なし (n=12)	8.7±1.4	15.3±8.1
地域・町内での役割やボランティア活動	あり (n=28)	7.8±1.5	12.9±5.6
	なし (n=58)	8.2±1.5	12.6±6.1
仕事 (社会的役割)	あり (n=34)	8.2±1.3	12.4±5.5
	なし (n=52)	7.8±1.7	12.9±6.2
町内自治会活動への参加	参加 (n=35)	7.7±1.5	11.6±4.7
	不参加 (n=51)	8.3±1.4 †	13.5±6.5
外出頻度	週3,4回以上 (n=43)	7.8±1.5	11.9±5.2
	週1回以下 (n=43)	8.3±1.4 †	13.5±6.5

† 検定 *p<0.05 †p<0.10

3) 介護期間、死別からの経過期間、被介護者との関係性、対処方略との関連

介護期間などの諸変数と達成感・満足感および空虚感との関連を表6に示した。

達成感・満足感と空虚感との関連についてみると、両者の間に有意な負の相関が認められた ($r=-0.24$, $p<0.05$)。

達成感・満足感と諸変数との関連については、介護期間、死別からの経過期間において関連は認められなかった。被介護者との関係性との関連については、要介護以前の関係性においては関連は認められなかったが、要介護以降の関係性との間に有意な正の相関が認められた ($r=0.31$, $p<0.05$)。また、対処方略の下位次元である「介護におけるペース配分」との間に有意な正の相関が認められた ($r=0.45$, $p<0.01$)。

空虚感と諸変数との関連については、介護期間、死別からの経過期間、被介護者との関係性、対処方略の何れにおいても関連は認められなかった。

表6 諸変数と達成感・満足感、空虚感との相関係数

	達成感・満足感	空虚感
空虚感	-0.24*	1.00
介護期間	0.18	0.03
死別からの経過期間	0.07	-0.09
(被介護者と介護者との関係性)		
要介護以前の関係性	0.19	-0.06
要介護以降の関係性	0.31*	-0.07
(介護への対処方略)		
介護におけるペース配分	0.45**	-0.05
介護役割の積極的受容	0.18	-0.02
気分転換	0.01	0.06
私的支援追究	0.12	0.11
公的支援追究	0.12	-0.10

Spearmanの順位相関 *p<0.05 **p<0.01

V. 考察

1. 達成感・満足感と死別前要因との関連および介護者支援について

本研究では、介護と死の看取りに対する達成感・満足感を、「介護を成し遂げたという達成感がある」、「満足のいく看取りができたと感じる」の2項目を適用し把握した。その結果、達成感があると回答した介護者は70.9%、満足のいく看取りができたと感じていた介護者は76.7%であり、この2項目について感じないと回答した3.5%、および2.5%を大きく上回った。島田²⁵⁾は、本調査と同様に訪問看護ステーション利用者の介護者を対象に調査し、看取りについて「満足した」、「やや満足した」と回答した介護者を148人(73.3%)と報告している。これは、本調査における達成感70.9%、満足感76.7%と近い値であり、両調査ともに7割程度の介護者が、被介護者の死の看取りに対して満足感を抱いていた。

達成感・満足感と死別前要因との関連については、1. 介護者の属性(性別、年齢、続柄)、2. 介護者の介護中の生活状況(趣味・楽しみ、生きがい、行き来する友人、家庭での介護以外の役割、地域・町内での役割、仕事、町内自治会活動への参加、外出頻度)、3. 介護期間、4. 被介護者との関係性(要介護以前、要介護以降)、5. 介護への対処方略の5事項を設定し検討した。その結果、介護者の年齢、要介護以降の被介護者との関係性、対処方略の下位次元である「介護におけるペース配分」と達成感・満足感との間に有意な正の相関が認められた。つまり、介護者の年齢が高いほど、要介

護以降に被介護者との関係性が良好なほど介護者の達成感・満足感が高かった。また、「介護におけるペース配分」の意味である、介護者が自分の健康のバランスを考えて介護を行っていた介護者ほど達成感・満足感が高かった。

坂口²⁶⁾は、配偶者喪失者の精神的健康と死別前要因との関連を検討し、故人の死への心の準備ができていた人、闘病中に故人との良好なコミュニケーションがとれていた人、故人の死を安らかであったと思っている人ほど、精神的健康の状態が良好であったと報告している。また、Koop, P. M²⁷⁾は、故人と家族との良好な関係性が死別後の適応を促進すると述べている。本研究においても、坂口、Koop, P. Mが指摘した故人との良好な関係性について、これを支持する結果が得られた。

介護者の満足感の関連要因については、できる限りの介護ができた介護者（オッズ比5.0）、死への心構えや準備ができた介護者（オッズ比3.0）ほど看取りに対する満足度が高かったと島田²⁵⁾は報告している。「できる限りの介護ができた」ということは、本研究で達成感の把握に用いた「介護を成し遂げた」に対応する意味であると解釈することができる。本研究では、達成感・満足感は死別後の生活へ適応する上で促進的に作用するのではないかと考え達成感と満足感を統合して把握したが、介護を成し遂げた達成感は見取りに対する満足感に影響する要因の一つとして、この両者は密接に結びついているのではないかと考えられる。

以上のことから、介護と死の看取りに対する達成感・満足感を高めるための死別前における支援としては、被介護者と家族介護者との関係性を良好に保つための関係調整、および、介護者が健康を維持しながら介護できるよう、介護者の健康管理を支援することが重要であることが示唆された。

達成感・満足感と空虚感との関連については、両者の間に有意な負の相関が認められ、達成感・満足感が高い介護者は空虚感が低く、逆に達成感・満足感が低い介護者は空虚感が高かった。したがって、達成感・満足感を高めるための死別前からの支援は、死別後の介護者の空虚感の軽減にもつながる可能性があることが示唆された。

なお、達成感・満足感と介護中の生活状況との関連においては、町内自治会活動に参加しない人、外出頻度が少ない人は達成感・満足感が高い傾向にあった。この結果について、被介護者と向き合う時間を十分確保することは介護者の達成感・満足感につながると解釈できなくはないが、介護者の年齢により交絡が生じている可能性が考えられる。本研究は単変量解析のみであったが、多変量解析により変数間の相互関連を分析し今後の更なる検討が必要と考える。

2. 空虚感と死別前要因との関連および介護者支援について

介護役割喪失に伴う空虚感の把握には、empty nest syndromeの概念を適用し6項目の質問により把握した。項目全体の回答分布をみると、「少し違う」あるいは「全く違う」を選択した介護者が52.3%~76.7%であり、全体としては、空虚感を抱いていない者の方が多いと解釈された。しかし、項目毎にみると、介護を終え虚しい気持ちを抱えている介護者が23.3%、生活のはりを失ったと感じる者は20.9%であり、5人に1人がこれらの感情を抱いていた。また、自分の役割がなくなると感じる介護者が16.2%であり、6項目のなかで最も少数であった「介護を終えてからやる気がおこらない」についても10.4%の介護者は感じると回答していた。このことから、在宅要介護高齢者を看取り終えた1~2割程度の介護者は、介護役割喪失による空虚感を抱いているのではないかと推察され、これらの人の中には死別後の新たな生活に適応する上で何らかの支援を必要とする介護遺族がいる可能性も否めない。

現在、わが国の介護の公的支援は被介護者の死亡により終了となる場合が多く、一部の病院や訪問看護ステーションなどで遺族ケアが行われたり、遺族への連続講座^{28,29)}などの取り組みがなされているものの、死別後の介護者支援については多くの課題が残されている。要介護高齢者の増加に伴い介護終了後の介護者支援の必要性が今後高まる可能性も考えられることから、被介護者が亡くなった後の介護者への生活適応に向けた支援体制を整える必要がある。

介護役割喪失の空虚感と死別前要因との関連については、達成感・満足感と同様の変数を用いて検討した。その結果、関連が認められたのは、介護者の年齢、続柄、生きがいの有無であった。つまり、介護者の年齢が高くなるほど空虚感が強いこと、また、配偶者を看取った介護者は空虚感が強い傾向にあることが示唆された。一方、介護中に何らかの生きがいを持つことは死別後の空虚感を軽減することにつながることを示された。高齢の介護者や、配偶者を介護している場合は、死別後の生活適応を視野に入れ、介護者の生きがいを尊重し、ない場合は本人が生きがいと思えるものを一緒に見つけるような介護者支援も重要なのではないかと考える。また、在宅介護支援においては、介護中の被介護者・介護者への支援計画にとどまらず、死別後の介護者の生活状況をアセスメントし、高齢な介護者等で死別後の生活適応の困難性が考えられる場合は、被介護者・介護者の健康状態、生活状況などを総合的に踏まえた上で、介護者自身が活用できる地域ケアサービスを死別前から、あるいは死別後すみやかに紹介・提供することが必要なのではないかと考える。

VI. 結 論

在宅要介護高齢者の介護を終えた後の家族介護者の、介護と死の看取りに対する達成感・満足感および介護役割喪失に伴う空虚感の状況を把握し、それらと死別前要因との関連を明らかにすること、また、死別後の生活適応を視野に入れた死別前からの介護者支援について検討することを目的に、過去1年半から2ヶ月前の間に在宅要介護高齢者を看取り終えた家族介護者を対象に質問紙調査を実施し、以下の結果を得た。

1. 介護を成し遂げたという達成感を抱く介護者は61人(70.9%)、満足のいく看取りをしたと感じる介護者は66人(76.7%)であった。
2. 介護役割喪失に伴う空虚感では、介護を終えむなしさを抱く介護者が20人(23.3%)、自分の役割がなくなったと感じる介護者は14人(16.2%)であった。
3. 要介護以降の被介護者との関係性と、達成感・満足感との間に有意な正の相関が認められた($r=0.31, p<0.05$)。
4. 介護対処方略の下位次元の一つである「介護におけるペース配分」と達成感・満足感との間に有意な正の相関が認められた($r=0.45, p<0.01$)。
5. 空虚感と続柄との間に関連が認められ($p<0.01$)、多重比較の結果、夫の空虚感(息子、嫁よりも有意に高く($p<0.05$))、妻の空虚感(嫁よりも高い傾向にあった($p<0.1$))。
6. 介護中に生きがいを持っていた介護者は持たなかった者より空虚感が低かった($p<0.05$)。

以上より、介護と死の看取りに対する達成感・満足感を高め、役割喪失の空虚感を軽減するための死別前における支援として、介護者と被介護者との関係性を良好に保つよう関係調整を図ること、介護者が健康を維持しながら介護できるよう、健康管理を支援すること、介護者の生きがいを尊重することが重要であると示唆された。

謝 辞

本研究の実施に際し多大なご協力とご理解、ご指導を賜りました訪問看護ステーションの皆様、アンケートにご協力くださいました介護者の皆様へ深謝申し上げます。また、お亡くなりになられたご利用者様には心よりご冥福をお祈り申し上げます。

文 献

- 1) 厚生労働省編：厚生労働白書 平成17年版。pp44-65, 株式会社ぎょうせい, 東京, 2005
- 2) 日本死の臨床研究会編：死の臨床 9 高齢社会とターミナルケア。pp277, 人間と歴史社東京, 2003
- 3) Backer BA, Hannon N, Russell N: 岡堂哲雄, 大西和子監訳：死とその周辺死への総合的アプローチ。第10章 死別と悲嘆, pp256-280, 廣川書店, 東京, 1997
- 4) 山田京子：看取りのケアのノウハウ グリーフケア。訪問看護と介護, 4(4), 248-255, 1999
- 5) A.デーケン編：死の準備教育 第2巻 死を看取る。pp254-274, メヂカルフレンド社, 東京, 1986

- 6) 坂口幸弘, 柏木哲夫, 恒藤暁: 配偶者/親喪失後の精神健康と家族の関係性. 公衆衛生, 64 (2), 139-142, 2000
- 7) 東村直美, 坂口弘幸, 柏木哲夫: 死別経験による遺族の人的成長. 死の臨床, 24 (1), 69-74, 2001
- 8) 広瀬寛子, 田上美千佳: 遺族のためのサポートグループにおける「思い出の品を持ってきて語ること」の意味: がんで家族を亡くした人たちの悲嘆からの回復過程への影響. 日本看護科学会誌, 25 (1), 49-57, 2005
- 9) 松島たつ子: ホスピス緩和ケアにおける死別を体験する家族のケア. 死の臨床, 24 (1), 2001
- 10) 加藤隆子, 景山セツ子: 小児がんで子どもを亡くした父親の悲嘆課程に関する研究. 日本看護科学会誌, 24 (4), 55-64, 2004
- 11) 梅崎薫, 笠島茂, 成瀬優知, 鏡森定信: 高齢期における配偶者死別と人的交流の変化. ストレス科学, 13 (1), 54-60, 1998
- 12) 寺崎明美, 小原泉, 山子輝子, 間瀬由記, 林洋一: 高齢女性の配偶者死別における悲嘆と影響要因. 老年精神医学雑誌, 10 (2) 167-180, 1999
- 13) 坂口幸弘, 柏木哲夫, 恒藤暁: 老年期における配偶者との死別後の精神的健康と家族環境. 老年精神医学雑誌, 10 (9), 1055-1062, 1999
- 14) 山田紀代美, 佐藤和佳子, 鈴木みずえ, 野村千文: 介護を終了した介護者の死別期間と疲労感の変化に関する研究. 日本看護研究会雑誌, 24 (4), 21-31, 2001
- 15) Lundin, T: Morbidity followed sudden and unexpected bereavement. British Journal of Psychiatry, 144, 84-88, 1984
- 16) 佐藤志穂子: 死別者におけるPTSD-交通事故遺族34人の追跡調査-. 臨床精神医学, 27 (12), 1575-586, 1998
- 17) 岡村清子, 河合千恵子: 高齢女性における配偶者喪失後の役割移行と適応. 老年社会科学, 9, 53-70, 1987
- 18) 大須賀恵子, 大澤功, 加藤弥和他: 夫と死別した妻の介護に対する満足感と後悔. 公衆衛生, 69 (6), 514-519, 2005
- 19) 鈴木志津枝: 遺族ケア. 緩和医療学, 4 (3), 49-53, 2002
- 20) 岡林秀樹, 杉澤秀博, 高梨薫他: 在宅障害高齢者の主介護者における対処方略の構造と燃えつきへの効果. 心理学研究, 69 (6), 486-493, 1999
- 21) 千丈雅徳: 母親の空の巣症候群. 教育と医学, 21 (6), 642-546, 2002.
- 22) 後山尚久: 現代の家族関係が女性の心身に与える影響 成長した子供と母親との関係が女性の心身に与える影響-空の巣症候群-. 日本女性心身医学会雑誌, 7 (2), 192-197, 2002
- 23) 筒井末春: 心の不健康境界状態への対応主婦症候群 (空の巣症候群). 地域保健, 20 (12), 31-36, 1989
- 24) 堀口文, 太田博明: ミドル・エイジ・シンドロームの理解と対策 空の巣症候群ミドル・エイジ・シンドロームの理解と対策 空の巣症候群. 心身医療, 6 (3), 295-298, 1994
- 25) 島田千穂, 近藤克則, 樋口京子他: 在宅療養高齢者の看取りを終えた介護者の満足度の関連要因-在宅ターミナルケアに関する全国訪問看護ステーション調査から-. 51 (3), 18-24, 2004
- 26) 坂口幸弘, 柏木哲夫, 恒藤暁: 配偶者喪失後の精神的健康に関連する死別前要因に関する予備的研究. 死の臨床, 24 (1), 52-57, 1999
- 27) Koop, P.M., Strang, V: Predictors of bereavement outcomes in families of patients with cancer. Canadian Journal of Nursing Research, 29, 33-50, 1997
- 28) 河合千恵子: 配偶者と死別した中高年者への連続講座による介入とその効果. 心理臨床学研究, 15 (5), 461-472, 1997
- 29) 河合千恵子: 配偶者と死別した中高年者の悲嘆緩和のためのミーティングの実施とその効果の検討. 老年社会科学, 19 (1), 48-57, 1997